



インターネット環境が整って、いつでもどこでも検索・調査できるようになり、ますますインターネット上の情報が重要になっていると思います。読者のなかにも、ちょっとした調べ物をネット検索で済ませるという方も多いのではないのでしょうか。その際には、Wikipedia (ウィキペディア)<sup>1)</sup> とよばれるフリー百科事典もよく用いられることと思います。原稿執筆時でウィキペディア日本語版 (図1) には75万項目以上の「記事」が掲載され、総ページ数は200万ページを超えており、おそらくこれまでに作られたどんな百科事典よりも多くの内容が掲載されているものと推測されます。執筆者自身も、その情報量の多さからまずウィキペディアで調べ物をすることがよくあります。

その一方で、大学教員や研究者は、学生や初学者がネットで調べて知識を得ることに否定的なことも多く、レポートに書いたり、発表でリファレンスに挙げたりすると、過剰に反応することも少なくありません。かくいう執筆者にも覚えがあります。自らが頼りにするにもかかわらず、学生や初学者にそれを認めないのでは自己矛盾しているのですが、読者の中にも似たような経験をおもちの方も多いのではと推測されます。

そもそもこのような問題が起きるのは、インターネット上にある情報は信憑性が不明で、ネット関係者から「嘘が嘘と見抜けない人には使えない」とぬけぬけと言われてしまうような信頼性の低さが原因にあると思います。その中にあってもウィキペディアは、「間違いや問題のある記述がなされた場合、それを善意の利用者らが修正して精度を高める」(ウィキペディアのホームページから) とされて



図1 Wikipedia「光学」のページ。

表1 光学関係キーワードで説明ページを検索した結果。

(1) 応用物理学用語大事典から抽出されたもの	1344 語	
(2) ウィキペディアで検索されたもの	609 語	※(2) ∈ (1)
(3) 説明ページがあったもの	274 語	※(3) ∈ (2)
(4) そのうち光学以外の語が説明されたもの	17 語	※(4) ∈ (3)
(5) 詳細に見ることにした語	253 語	(5) = (3) - (4)
(5-1) ごく短い説明(1行程度)のみ	12 語	
(5-2) 短い説明(1ページ程度以下)	136 語	
(5-3) 長い説明	105 語	

表2 各説明ページの内容の正しさについての解析結果。

A. おおむね正しく記述されている	227 語	(89.7%)
B. 軽微な誤りを含む	1 語	(0.4%)
C. 一般的な説明とは異なる	7 語	(2.8%)
D. 明確な誤りを含む	4 語	(1.6%)
E. 説明が不足している	12 語	(4.7%)
F. 分野ごとの定義が異なり判定不能	2 語	(0.8%)
合計	253 語	(100%)

いて、信頼性は比較的高いだろうと思えます。そこで、実際の程度正しく記述されているのか調べてみようと思ひ、光学に関係する用語について調査してみました。

調査方法は、まず応用物理学用語大事典(1999年出版、コンパクト版)<sup>2)</sup> から光学に関係する語(1344語)を抽出し、それらの語について、ウィキペディアで検索されるか、説明ページがあるかを調べ、説明ページにある内容について正しく記述されているかどうかを判定しました。ウィキペディアで検索されたものは609語、ページがあったものは274語で、そのうち17語は対象の光学関係語とは違っていたので省き、残りの253語を判定の対象にしました(表1)。

判定対象の語は1語ずつ内容を確認していき、光学に関する記述について、(A) おおむね正しく記述されている、(B) 軽微な誤りを含む、(C) 一般的な説明とは異なる、(D) 明確な誤りを含む、(E) 説明が不足している、(F) 分野ごとの定義が異なり判定不能、に分けて判定しました。結構膨大な作業量がありましたが、このあたりは執筆者の研究室の学生3人に手伝ってもらって作業を行いました。最終的な判定作業は執筆者自身で行い、基準としては「光学」の大学講義の試験で各語の説明を問われた際に答案として書かれるべき内容を想定して判定しました。実

際には一目瞭然のことが多く、判定に悩むことはあまりありませんでした。

判定の結果を表2にまとめます。注目すべき点は、ほぼ9割の語がおおむね正しく記述されていたことでしょう。これらの語の記述は応用物理用語大事典と比しても決して見劣りしない内容か、むしろそれ以上の記述がなされていました。記述の中には歴史や重要人物の記述や文学との関係など、専門事典からはうかがい知れないことまで書かれてあり、とても興味深いのですが、これらについては執筆者の能力不足から、正誤の判定には加味していません。

各語の説明は数ページにわたる長いものから1行程度の短いものまでさまざまですので、説明の長さが正誤に関係あるようにも思えます。そこで、説明の長さごとに、おおむね正しい(A)と判定された語数を調べてみました。ごく短い説明(数行程度)のみのもの(5-1)については、12語のうち7語は説明が不足しており、おおむね正しい(A)に判定できたのは5語(42%)のみでした。それに対して、1ページ程度の短い説明のもの(5-2)と長い説明のもの(5-3)では、それぞれ136語中124語(91%)、105語中98語(93%)、と大差ありませんでした。このことから、「複数回のアップデートが行われるなどして手間をかけて作られたページは90%程度は正しいが、ごく短い説明しか与えられていないページは注意が必要」といえるかもしれません。

また、具体的な内容についてみると、光学に関する語句だけにしても、分野横断的な百科事典では、語の使い方が各分野で異なり、定義が違ふと考えられます。例えば、「赤外線」の分類が分野によって異なっていることがよく知られています。実際にウィキペディアで調べると、中赤外線と遠赤外線との境界の波長は $4\mu\text{m}$ にされていて、光学分野でいわれる境界波長(応用物理用語大事典では $25\mu\text{m}$ )とはかなり異なっています。これはどちらが正しいということではできないので、本調査では「赤外線」と「遠

赤外線」は判定不能としてあります。調査を行う前にはこのような語がかなりの数あるものと想像していましたが、実際に調査をしてみると、対象の253語中には「分野によって定義が異なる語」は他にみあたらず、対象を広げたとしてもあまり多くないと推測されます。

このほか、分野によっては記述の分量に差がみられます。例えば、色彩に関する語は、説明も多く、網羅的に記述されていることが多いのが特徴的でした。これは、資格試験対策などで利用される方が多いからと推測されます。また、天文や写真に関する語は説明が充実しています。これは愛好者の方々がこまめにアップデートされているからだろうと思います。このように、一般的に活用される機会の多い分野やたくさんの愛好家がいるような分野では、技術活用の裾野が広く、インターネット百科事典がより活用されているのだろうと推測されます。

今回の調査では対象語を10年以上前に刊行された事典から取りましたので、最新のキーワードは調査対象に入っていません。最新の語がどのように記述されているのか興味がありますが、それを調べる前に、こういった最新の語を専門家として正しく説明する努力をしたほうが有意義かもしれません。最新の語や一般にはなじみの薄い語は、専門家が正しく記述するしか方法がないので、専門的に正しい内容を広めるためにも、われわれももっと積極的にインターネット上の活動に取り組んだほうがよいのではと、今回の調査を通して考えさせられました。最後に、調査に協力してくれた学生さんたちに感謝します。

(奈良先端科学技術大学院大学 杉浦忠男)

## 文 献

- 1) <http://ja.wikipedia.org/>
- 2) 応用物理学会編：コンパクト版応用物理用語大事典(オーム社、1999)。元本の応用物理用語大事典は1998年刊行。